

熊本地震と医療・教育現場の被災状況

熊本大学の被災状況と復興への取り組み



熊本大学理事・副学長／大学院生命科学研究部
細胞病理学分野教授
竹屋 二元裕

本年四月の大地震で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。今回の一連の地震によって熊本大学にも大きな被害が生じました。本学のシンボルである五高記念館を含む三棟の国指定重要文化財に加え、工学部一号館と病院地区の旧外来臨床研究棟の計五棟が立入禁止となりました。それ以外にも、本荘北地区では臨床研究棟、基礎医学研究棟、医学総合研究棟などが被害を受け、発生医学研究所、エイズ学研究センターなどの本荘中地区の建物にも壁の亀裂や外壁材の崩落等の被害が生じました。さらに多くの大型研究機器が転落・転倒あるいは配水管破断による水濡れなどで使用不能となりました。

大学執行部では、前震発生翌四月十五日から連日、災害対策本部会議を開き、学生・教職員の安否確認や被災状況の把握に努めて参りました。人的被害としては、学生一名が火傷で重傷を負いましたが、他は軽傷者が百余名で、全員の無事が確認できました。

附属病院では既に診療関連施設の再開が完了しており、建物被害は

軽微で、本震後の四月十八日(月)の外来診療を休診した他は、通常通りの診療を実施し、入院患者の被害もありませんでした。上水道は約一日間の供給停止となりましたが、陸上自衛隊の給水支援により十八日(月)から手術を含む通常の診療体制を維持することができました。この間、地震による救急搬送患者の受け入れや他医療機関の重傷患者を受け入れるなど、被災地医療の中核としての機能を果たすことができました。

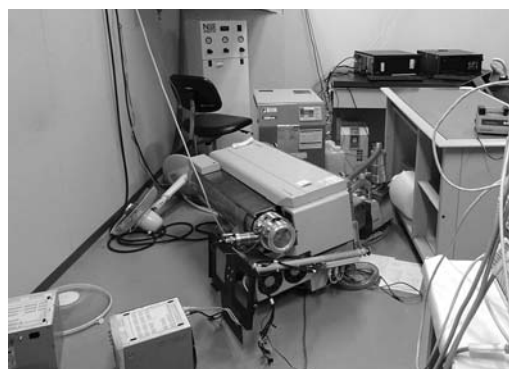
地域の被災者への支援として、各キャンパスの体育館、武道場、附属小中学校の教室などを一時避難所として開放し、最大で約二八〇〇人の地域住民や被災学生を受け入れました。また、留学生を含む学生ボランティアが職員と共同で避難所運営に携わりました。

今回の地震被災に際しましては全国の多くの大学や機関から様々な支援を戴きました。とくに国立大学協会ならびに全国からの人的・物的支援の窓口としての役割を担って戴いた九州大学に心から感謝申し上げます。

学生講義は連休明けの五月九日(月)から再開し、夏休みを短縮することでほぼ予定の授業数を確保することができました。一方、多くの学生が住居被害を受け、学資負担者が大きな被害を受けたケースも少なくないため、就学支援として「熊大復興の意気や溢るる奨学金」制度を設立しました。その原資としては、熊本大学基金内に設置した「熊大復興事業基金」への浄財を利用して戴いております。医学部医学科後援会からは、医学科学生を対象としてご支援を戴きました。また、肥後医育振興会におかれましては、医・歯・薬・保健学系の大学院に在籍する県内在住の外国人留学生を対象とした奨学金制度をいち早く立ち上げて戴きました。各方面からの温かいご支援に対し、心から感謝申し上げます。

本学では「復興の意気や溢るる熊本大学」というスローガンを掲げ、創造的復興を目指しております。さらに、「くまもと水循環／減災研究教育センター(仮称)」等の設置を通じて、本学のみならず、地域の復興に向けて本学の人的資源を活用して参りたいと存じます。

今回の未曾有の大地震は熊本地区に大きな被害をもたらしました。今年度の補正予算で本学にも熊本地震復旧等予備費が措置されましたが、教育研究が従来の軌道に戻るまでには相応の年月が必要と思われま



医学総合研究棟5階では、質量分析装置が転倒し使用不能となった。



旧外来臨床研究棟の4階部分。柱に大きな亀裂が見られる。立入禁止措置に伴い同研究棟内の麻酔科学分野、腎臓内科学分野、脳神経外科学分野は医局移転を余儀なくされた。

一方で、今回の地震に遭遇し、震災時の緊急対応や日頃からの減災対策等に関して多くのことを学ぶことができました。今回の貴重な経験に基づき、地域の知の拠点としての役割を果たすべく、熊本地域の創造的復興に貢献したいと思っております。